

後の著述である『金剛三昧経論』の中で明確となるのである。この『金剛三昧経論』は元暁の信仰告白書であり、元暁の三昧と止観の理解を深く示している著述である。この中で『金剛三昧経論』の文勢は法華経の序文と同じであり、大義も同じく「法華経の異目」であると論じ、又、『金剛三昧経論』の「入如来禅」を解釈するにあたって法華経を引用しているのである。これは明らかに天台の影響の帰結であろう。天台教学が半島に伝播された年代・元暁教学における天台の位置等についての詳細は後の機会に論述したい。

日蓮聖人の題目論

丸 茂 龍 正

日蓮聖人は、南無妙法蓮華経の題目を、一切衆生の救済の要法として、その教えの根幹とし、「唱題成仏」を説き明かされた。

日蓮聖人の説かれる唱題成仏は、多種多様な宗教的意味概念をもつが、宗教行為として所謂「口称」という行

為においても着目できる。

日蓮聖人の唱題成仏思想は、日本仏教史上における「口称」という修行の系付の上に、位置づけられる場合もある。

今回の発表は、伝統的な、日本仏教における、口称修行と、日蓮聖人の唱題成仏思想の相異点を明確にするために、「日蓮聖人の唱題思想の背景」をテーマに、平安仏教における法華経修行の具体像として、法華経の題目を唱えるという行為である、唱題に着目し、日蓮聖人に先行する唱題はいかなるものであったのか、また、日蓮聖人はそれをどのように踏まえ、独自の唱題思想弘通へ踏み出していったのだろうかという事を考察した。

平安時代の唱題の事例を辿ると、九世紀末には、その例が確認できる。それら、平安時代の唱題の特徴は、(一)唱題は念仏と並用或は観音・普賢・弥勒等の信仰と一緒に行なわれていた事。(二)「南無一乗妙法蓮華経」「南無平等大会一乗妙法蓮華経」等、題目においても不揃いであった事。(三)唱題は法華経読誦・書写等に代わる、簡略化された法華経修行であった事。以上三つを挙げることが出来る。(四)に付け加えれば、『法華験記』にみられる「法華経の持経者」の修行は、法華経読誦と書写であっ

た事がわかり、唱題の功德は読誦や書写に次ぐものだった事がわかる。同時により大きな功德を得る為には、智恵が必要であった事も想起される。

また、事例により、覚超・源信・覚運の比叡山の僧をはじめ、藤原氏等の貴族や更に庶民層に及んで唱題が行われていた事がわかる。当時の庶民が、識字能力が低い事や經典を手にすることが困難だった事を考えると、庶民にとって唱題は、法華經修行の最も入りやすい形であった事をも想起させる。

日蓮聖人は『唱法華題目鈔』『南条兵衛七郎殿御書』等において、これら平安時代の唱題の特徴に通ずる、雑行性や比叡山の僧侶の法華經修行についても触れており、日蓮聖人に先行する法華經信仰・唱題を認識されていた事がわかる。

しかし、『唱法華題目鈔』等の佐渡配流以前の遺文において、法華經純一で智恵よりも信が大切であり、唱題を第一の修行とする思想が見られ、同時に自らを「法華經の行者」と規定し、他の「法華經の持經者」と違う立場にある事を表明されている。

以上のように、日蓮聖人は、その形態においては平安時代の法華經修行を継承しつつも、唱題弘通の出発点よ

り、唱題を主体とし、一切衆生救済の要法として理論化していき、法華經純一信仰、唱題の統一を行う、法華經色誦の行者としての立場をとられていたのである。

今後、日蓮聖人の独自の唱題思想を更に明らかに、題目論の考察を進めたい。

本迹論の一考察

―桂林日隆の『私新抄』に表れた本迹論―

三 吉 廣 明

本迹同体異体論は、一致派本国寺日伝と日陣の論争が起こつてより、今日までその解決をみないのである。その議論の注意点は一致派は約宗勝劣、約体一致を立て、体玄義に議論の場をしばったことであり、日陣は必然的に体玄義の勝劣を主張した点である。

浅井円道先生は勝劣諸論師の本迹論を検討され、日隆の本迹論について、

一、日隆には実相同体の一致義が存する。

二、法体勝劣を宗家の体という場に限った。